革命

24号　2頁　20円
毎月1日・15日発行
発行所
東京都豊島区西池袋3-4-2
現代社
電話　東京（983）3429
振替口座東京—142518
編集発行人　田中五郎
購読料
6ケ月12回送料共300円

万国の労働者団結せよ

日本社会主義青年同盟
学生班協議会解放派

東大斗争勝利　全国教育斗争勝利　反産協斗争を巨大に前進せしめよ！

日共＝右派連合の反動的「封鎖解除—スト収拾」策動を粉砕し、反産協闘争を巨大に前進せしめよ！

一年余にもわたって斗い抜かれてきた東大斗争は、資本主義的教育のもつ根底的な矛盾を鋭く突き出しつつ斗われてきた。そして、我々の手によって発展させてきた東大斗争は、資本主義社会が「吸収」するには、日本学生運動かってない余りにも巨大な内容を突き出しつつある。

そのことは、一月九日以降の、官憲の戒厳令下における坂田文相加藤学長代行の東大斗争圧殺策動と、日共＝右派連合の「封鎖解除—スト収拾策動」という新たな局面こそが、なによりもその事実を明らかにしつつある。

しかしながら、一切の中間諸潮流は、このような東大斗争が生み落しつつある日本学生運動史上かってない巨大な果実を、現局面における斗いを即自的「反代々木斗争」へスリカエることをもって葬り去ろうとするきわめて日和見主義的傾向へと突き進みつつある。

東大斗争を、全国教育斗争のもっとも先鋭な反産学協同斗争として指導してきた我々は、きわめて重大な現局面において、反産協斗争への一切の敵対策動を粉砕し、教育斗争について無方針な諸潮流を越える。全国教育斗争勝利に向けての方針を明らかにしたい。

全東大全都、全国の斗う学友諸君！　東大斗争の現局面における斗いは、今日の日本学生運動の運命を決する重大な斗いである。

一切の敵対策動と日和見主義の中で、我々は、困難な局面におけける東大斗争勝利に向け、再度、東大斗争の本質を問わねばならない。東大斗争とは、何に対する闘いなのかと。

そして現局面におけるさまざまな社会性の対立関係の本質的矛盾とは何なのかと。

その中から現局面における方針も大胆に突き出さねばならない。

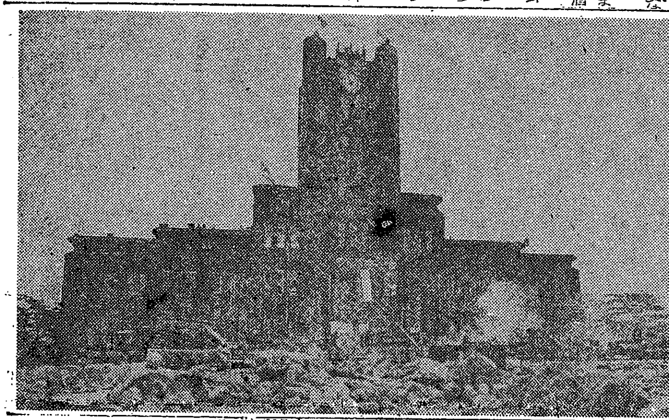
東大斗争は、資本主義的教育のもつ矛盾を鋭くえぐり出しながら斗われてきた斗いである。

現在の第三次合理化の風のような突撃は、産業を「労働監獄」へと向わせ、労働者を資本のもとへ絶望的に包摂し、教育を「専門白痴」産出の場へと追いやりつつある。七〇年代の資本自由化を結節点として日本帝国主義の命運をかけて、「産業再編成」「教育改革」は推進されている。

「医療合理化反対！」「産学協同路線粉砕」の革命なスローガンをかかげて闘い抜かれている東大闘争は、その意味で、日本帝国主義の「発展」のなかに一層の「隷属と競争と奇型化」を把えこれと真向から対決し、そして、これを越えて前進する革命的団結を築きしつつ闘われてきた。

そしてその階級府支配者階級は、この闘う団結の巨大な前進に恐怖し、「市民権」の剥奪に狂奔し、「反暴力キャンペーン」「罷用拒否」と矢継ぎばやの攻撃をかけ、そして「受験問題」を通して「全受験生、ひいては全国民の敵」として、闘う団結と「全国民」の"対立"を叫び、もはや"許されざるもの"と政治宣伝を繰り返えしてきた。

更に闘争の深化の中で、闘う団結の階級的道義性の偉大さゆえのこの大がかりな「締めつけ」を基礎に、政府は東大当局が、この「全国民の敵」を自主的に仕末しようとしない無責任きわまりない態度をもっていると槍玉にあげ、もし「タイム・リミット」までに収拾しないのならば「廃校」「政府直轄」だと、全東大生、教職員当局を脅し、最後の「詰め」に入ったのである。



日共の「民主化」路線の必然的帰結＝反革命的秩序派としての登場を粉砕せよ！

そして、日共＝右派連合は、この全社会的「締めあげ」に恐喝をあげた一部の学生を集め、「大学の自治の防衛」を闘いだとして、当局とともに「自主解決」＝「スト収拾」を突き進んでいる。日共＝右派連合は、権力と対決して大学を「民主化」するのだと主張していたし今でも主張しているが、豊川＝上田ラインと「対決」し大河内を批判して「近代化・民生」を旗印として登場してきた加藤体制と、日共＝右派連合との目的は「学園の民主化」であるという点で、すでに両者の一体化は時間の問題となり、一体化は、ブルジョア的秩序の加重によって深まってきたのである。

まさしく、七学部集会で"実現"された日共＝右派連合と当局との「民主化という名の結合」の本質とはこれである。

その意味で、資本制的教育そのものの矛盾に触れる反産協の斗いを通じてのコミューン的団結の形成の中で、学園の「民主化」という路線は、教育のもつ根底的矛盾に触れないが故に、ますます「奴隷の生活改善要求」へと自己をつきつめ、ブルジョア秩序の壁（斗いの中で浮き彫りされてくるものであるが）と権力の弾圧に屈服し権力と「斗う」ためには斗う団結を"粉砕"するという反革命秩序派として登場するのである。官憲の庇護の下にケバルトによる「封鎖解除・スト収拾策動」という、彼らの醜悪な姿は何によりもこのことを明白に物語っている。

現局面における東大斗争の基本的構造は以上であり、資本の社会的権力による「隷属と搾取と奇形化」を越えて前進する団結と斗いを前進させる斗いの頂点にある東大の勝利を勝ちとるために、我々はこうした一切の斗争破壊を粉砕して前進してきた。

しかしながら、共斗会議内の中間諸潮流の8・10告示以降の軒並の破産は、現局面において著しい混乱ぶりを示しつつ、一連の日和見主義的傾向として現われている点を鮮明にし、共斗会議が桎梏として現われつつある状況を突破し、東大斗争の革命的前進を勝ち取らねばならないと考える。

9日から11日かけての重大な局面における中間諸潮流の混乱は、第一に、東大斗争と全国教育斗争の方針の破産と、第二に、当局、日共＝右派連合のスト収拾策動粉砕斗争の即自的な「反代々木斗争」へのスリカエの誤りであることが確認されなければならない。とりわけ、10日の全学集会粉砕斗争11日の教養学部代議大会デッチ上げ粉砕斗争における中間諸潮流の誤りは決定的である。今後の日共＝右派連合の「封鎖解除—スト収拾策動」を粉砕していくためには、これらの誤りは全面的に結括克服されていかねばならない。

10日の「全学集会」は当局と、日共＝右派連合の「スト収拾」への突破口であった。当局は五〇〇〇人の機動隊の防衛の中で大胆な収拾のための最後案を提起し、日共＝右派連合と「確約書」をかわし、日共＝右派連合はこの「確約書」をもって学生大会、代議員大会でスト解除を決定していくという過程は10日以前にも明らかであった。われわれは、この彼らの「収拾」の突破口を粉砕すべく、10日の「全学集会」粉砕闘争を実力阻止闘争と会場に向う大衆の組織化を通して貫徹する方針を提起し、一切の中間諸潮流の日和見主義、闘争放棄の中でわれわれのみが、本郷、駒場の先進的学友とともに断乎として闘い抜いた。この闘争に対し、機動隊は、ガス弾、大量検挙（一四〇名）の大弾圧、ラグビー場入場前弾圧を加えてきた。（三十人は、日共＝右派連合のピケット・ラインを突破し、ラグビー場内で参加学生を結集して、二〇〇名の抗議デモンストレーションを勝ち取った）しかし「全学集会」の現実的粉砕は実現できなかったが、問題は、この闘争の闘争放棄について各諸潮流の総括が問われているということである。

さらに、10日から11日にかけての教養学部代議大会」粉砕闘争はデッ上げのスト収拾の代議員大会そのものの実力粉砕であり、われわれは、この目的の実現の手段として日共のゲバルト部隊の学外排除を提起した。だが、一部の諸君達は、この手段を実は、目的として設定し、結果として、「代議員大会」粉砕を願望するという形で方針が逆転してしまっているがゆえに一方においては、局面に日和り、他方単なる武器のエスカレーションをその打解策としたり、あげくのはてには、闘争を放棄してしまうという犯罪的な行動に終始した。単に「反代々木闘争」として東大闘争の「勝敗」を考える部分は、今後の日共＝右派連合の反動的スト収拾策動に対決していくことはできないであろう事を11日の事態は明らかにしている（もっとも11月12日の図書館前の"衝突"の頃からその傾向はすでに明らかになっていたが。）

全国の連帯ストを背景に 全学バリケード封鎖斗争 入試強行粉砕を貫徹せよ！

すでに、日共＝右派連合は完全な秩序派として登場し、機動隊の庇護の下に、大学当局の「妥協案」を批准し、「封鎖解除—スト収拾」へと邁進している。当局の入試強行のための「妥協案」として"提示"したものは、何だったのか？まさしくそれは「近代化—民主化」の下、より一層の産学協同路線の貫徹と「参加」のもとでの学生の活動の体制内的吸収策動が追求されている反動的性格をもつものであり、産学協同路線のより一層の「隷属と分断と競争と奇形化」のるつぼへ自からを生ける屍として投げ入れるもの以外の何ものでもない。

東大闘争の現局面が突き出している峻厳なる現実とは、日共＝右派連合に表現される路線の貫徹の中で、今にもまして、より一層恐るべき「隷属と競争」の監獄を現出せしめるのか、はたまた、それを粉砕し切って「隷属と競争」の産業協同路線に対決する闘いをより一歩前進せしめるのか、である。

政府支配者階級は、大学教育が産業と国家の要請に応え、学生の政治的社会的活動を「秩序」の枠内に管理するものであれば、目に見えて直接に大学の管理運営を行なうことはない。十項目の「確認書」とは、その限りでの「妥協案」であり、また、それをも拒否する部分には、一切の国家的暴力をもっても粉砕を用意する。加藤の15日に対する「学内立入禁止令」と「機動隊による強制撤去」はその事をなによりも明らかにしている。

現局面における屈服が、以前にもましての教育監獄の現出である当局、日共＝右派連合の「封鎖解除—スト収拾策動」を粉砕し、東大闘争の勝利に向けて闘いを再構築してゆかねばならない。

全国教育闘争の最も尖鋭な闘いを闘い抜いている東大闘争の困難な現局面こそ、日本学生運動の運命を担っているといっても過言ではない。

全都、全国の先進的学友諸君！　直ちに全都、全国の大学で東大闘争勝利連帯ストライキを打ち抜き出し、大衆的な規模で行動隊を組織し、東大に結集し、当局、日共＝右派連合の一切の「封鎖解除—スト収拾策動」を粉砕し、第八本館（駒場）、安田講堂を拠点に、全学封鎖闘争へと押しあげていかなければならない。

また、同時に、闘いの階級的道義性を、反共協の闘う団結と、反合理化闘争を闘い抜く労働者の団結を連帯結合し「単一青医連の協約団体としての公認」をはじめとした当面の要求「七項目」を獲得していく闘いを前進していかねばならない。（六九・一・十七）

十四日、全国各大学で東大斗争勝利連帯ストを獲ち取る！

九大（文）駒沢大（文・法・短）

日共＝右派連合の反動的「封鎖解除—スト収拾策動」を粉砕し、東大斗争を更に、プロレタリア統一戦線の下における反産協の巨大な斗いとして勝利させるための連帯ストライキが九大（文）、駒沢大、（文法・短）連帯集会が関西学院大（法）、神奈川大学で、反帝学生評議会の斗う同志の手によって圧倒的に勝ちとられた。

今朝、東大に官憲八千乱入

機動隊導入を弾劾する！

反産協の旗のもと、全国の学園さらに全国の職場の反合理化闘、と固く連帯しつつ、ブルジョア社会をしん撼させつつあった東大闘争に恐怖した国家権力は、1月18日朝7時4分、八千の機動隊を東大本郷に導入し、血の弾圧にのり出した。我々は、大学当局・国家権力の凶暴な弾圧に抗議するとともに、全国の学園・職場より固い団結をもって闘い抜くことを誓う。

右派連合の収拾策をはねのけ、労・学の斗う団結で前進せよ！

9日　二度の機動隊導入をはねのけ 収拾策動紛砕闘争 前進

入試という「社会的行事」の中止か否かのタイムリミットを目前にして、東大斗争は文字通り全社会と敵対して斗われている。受験生の悲劇をも含めて国民の要請という名の下に文部省・大学当局・当局に迎合し、独自の小市民的利害を公然と政治の舞台に登場させ、妥協と収拾の活動を行いつつある"秩序派"＝有志連合、自己の基盤を完全に喪失し「七項目要求」に乗り移ることで有志連合とユ着し、外苑での全学集会への参加→スト解除、封鎖解除へと一際をかなぐり捨てた民青の暴力的組織擁護、これらの総ゆる敵対を紛砕しきるか否かを東大斗争は問われている。

民主的ポーズの下に中間的な位置をとり続けていた加藤体制は、文部省のつきつけた15日を見つめて、共斗会議に屈して破産するかそれとも国家権力の意志を貫徹すべく一挙に右傾化するかを問われていた。これらを背景に九日を迎える。

東大共斗会議と現在、学園斗争を斗い抜いている十大学（日大・中大・上智・明学・東洋・外語・教育・青学・電通・東大）の各共斗会議の呼びかけで、9日全都の武装した二千五百名の学友による「東大斗争勝利全都総決起集会」がかちとられた。10日に予定された全学集会を粉砕し、それに続くスト破壊のデッチ上げ学生大会を阻止すべく固い意志一致がなされた

集会前、直ちに学内の封鎖に向った。反帝学評を主力とした部隊はまず工学部の封鎖を行った。一方、革マル・フロントは理学部一号館に向い、中核・ブントは教育学部と経済学部へと向った。いずれもたてこもっていた民青との激烈な斗いを行った。八時過ぎ工学部を封鎖し、経済学部の一階を占拠したとき、一回目の機動隊の導入がなされた。一般学生の生命の危険という名目による、加藤代行の共斗会議への弾圧である。

直ちに安田講堂前に再結集し、機動隊導入に断固とした抗議集会を行い反帝学評と東Cスト実の隊列は、理学部一号館の封鎖に向った。中核、ブント、フロントは集会前帰ってしまい、革マルは安田講堂前で集会をしている。経済共斗を中心にした部隊が再度経済学部の封鎖を目指した。地区の民青を投入しての理学部の民青の投石と放水をはねのけて一階を占拠し更に民青を追いつめた時、正門、赤門、竜岡門、弥生門から一挙に機動隊が入った。一度学外に出て不忍の池に結集した反帝学評の主力部隊は学内奪還に向う。催涙ガスのたちこめる学内を奪還し、総括集会をしたときは、反帝学評二百五十と共斗会議二百を残すのみであった。全学集会を粉砕する過程での妨害者としてある民青との対立を口実にした機動隊の導入は明らかに運動の圧殺を意図しており、有志連合にのっかることで収拾可能とみた加藤の醜悪な本姿を示していったものであり、諸党派がこの日の斗争を最後迄貫徹しえなかったのは、民青をたたくことに党派的利害を見ているところの民青の物理力に逆規定された物理力主義者であった。反帝学評と共斗会議の斗う学友は、権力のむきだしの暴力と、共斗会議内の不充分性をも克服して全学集会紛砕の方針を再度確認した。

10日　機動隊の弾圧、民青の敵対紛砕し全学集会を実質的に紛砕

十月の全学封鎖紛砕斗争は、東大に泊り込んだ反帝学評三百の武装した部隊の秩父宮ラクビー場への紛砕斗争から開始された。

民青は、秩父宮ラクビー場へ行ってしまっては政治生命が破産するために学内での集会を主張して最大限ごねたが、結局、その後共斗会議を物理的に圧殺することで自己をとりつくろうことを暗に確認しつつ会場へ向った。

共斗会議といえば、当初10時から集会を行い、並行して戦術会議を開いて11時から斗争を開始する予定であった。ところが他党派は「民青が参加しないから焦点ではなくなった」とし、1時40分になってやっと集ってくるようなまさに民青に逆規定された、運動の論理を逆転した、従ってこの東大斗争のもつ意義を理解しえずただ参加したというアリバイ作りと獲物の分け前を狙う宗派根性をまる出し斗争とは本質的に無縁の存在であることを露呈していった。結局、我々の方針に屈してラグビー場へ行くことになったが、その理由たるや「民青が行くことになった」から「行く」ことにはしたが、機動隊五千を恐れて三々五々と行くという日和見切ったものであった。

そのころ青山にすでに着いていた反帝学評の部隊は機動隊の催涙ガスをうけながら集会粉砕の断固とした斗いを展開していた。多くの逮捕者を出しながらも千駄ヶ谷に移り隊列を整えて外苑に向い、繰り返し機動隊の阻止線を突破すべく死力を尽して斗い抜いた。

一方、武装した反帝学評の主力部隊とは別に会場に向った、東大全共斗を主力とする全共斗の隊列は、体育会系のピケを突破して会場に突入した。このわずか三〇名のデモに、会場に居た学生が加わり、一瞬にして二百名にふくれあがった。

加藤が、そして有志連合、民青が彼らを支持していると思っていた「一般学生」が、全共斗のデモに加わったのである。会場は思わぬ事態に騒然となり、実質的に全学集会は、その内部から瓦解していったのである。民青と当局とのボス交で集会を三時間を二時間にしたのは、民青のいう「全共斗一派による封鎖のエスカレート」を恐れたためではなく、彼らが賢明にもこのような事態を予測して集合はほんの形式を整え、その後に行う秘密の代表団交渉で妥協を成立させようとしたにすぎない。

この会場内の部隊と結合して集会紛砕を目指して機動隊との激突を終始繰り返した反帝学評の本隊は、百四十三名の不当な大量検挙にもめげず斗い抜き、集会の実質的紛砕をかちとったことをもって11日のデッチ上げ代議員大会紛砕にむけて東大に向った。百数十名を残すのみであった青ヘルが駒場に到着するとデモは千名になっていた。反産学協同路線の旗の下に早大斗争以降一貫して教育斗争を担い現在の天王山ともいうべき東大斗争の圧殺を通じた全国の斗争の紛砕を意図する支配者の本格的攻撃を真に粉砕し切る巨大な隊列であった。総括集会に於いて、児玉同志（医共斗）並木同志（大スト実委員長 代行）石橋同 志（共斗）がこの日の斗いの成果に踏まえ、直ちに東大のデッチ上げ代議員大会紛砕斗争を開始しようという方針を満場一致で確認した。

【デッチ上げ代議員大会粉砕に駒場寮へ向う反帝学評の隊列—10日】

11日　デッチ上げ代議員大会紛砕 敵対はねのけ本郷再封鎖

全学集会が実質的に我々の斗いの前に破産し、有志連合内部に全共斗への支持の動きを見た民青は、東大の代議員大会をデッチ上げるべく千五百の地区民をも含めた外人部隊を投入し、会場に予定されている寮食堂を背後に、明寮中寮、北寮の全共斗支持の学友を寮外に暴力的に出して、各寮にバリケードを築いていた。

休む間もなく、デッチ上げ代議員大会粉砕斗争は八時過ぎ開始された。昼の斗争に於いて多くの負傷者を出しているにも拘らず、反帝学評の隊列がまず、明寮から食堂への突破を開始していった。乱れ飛ぶ民青の投石の下を、代議員大会紛砕と東大斗争勝利の確信に満ちた隊列が進む。数名の同志が投石のために倒れる。尚も断固として進む隊列に数と武器を誇る民青は除々に後退し、ついに青いヘルメットが明寮の一階を占拠した。一方、フロント、中核、ブントM・Lの部隊はそれぞれ中寮、北寮に向って進んだ。

数時間に亘る激斗ののち、11日早朝の再度の斗いを確認して、八号館に全共斗の部隊は些かな休息をとった。

全共斗の部隊が駒場での斗いを続けている時、本郷では民青が、こそ泥のように留守を狙って封鎖の解除をしていた。全学集会の形式的な成立をみた坂田文部大臣が当局の一定の熱意を評価しながらも封鎖が解除され平常な状態に戻らなければ入試中止の決定はくつがえされるものではないと発表するや、国民の要求なる入試を自己目的化した民青は、官憲に替って斗争の破壊に、しかも全共斗不在の挙を衝いて、法文一、二号館、工学部の封鎖を解除し、安田講堂に投石を繰り返した。この間一際の学内への立ち入りを完全に遮断し本郷講内は一時的に民青の戒厳令下に入ったかにみえた。

11日早朝、駒場では再度、反帝学評と駒場共斗の部隊が「代議員大会」粉砕斗争を開始した。全共斗内及び他大学から結集した他党派はここに於いて斗争を放棄していた。武器のエスカレート等で物理的に民青をたたき出すことが大会を紛砕することであるとする部分は、民青物理力の前に屈していったのである。我々にとって獲取ちるべきは単に物理的に民青を攻撃することではなく、国家権力の入試中止↓大学閉鎖の恫喝の前に、当局に対して一定の妥協を強いるとして実は完膚なきまで権力の枠の中に囲い込まれる道を辿ろうとする諸君に対し、七項目要求を貫徹することを通じて頑強に本質をつきつけ、彼らを支える幻想そのものを破壊し斗う隊列への参加を獲ちとるものであり、民青との対立は、反産協の階級的意志に実践的に敵対する部分への攻撃なのであって、けして逆ではない。そうでない部分は、民青のゲバルドが強いときにはあっさりと斗争を放棄してゆく。数十名を駒場に残して各大学に帰ってしまった中核・ブント等がこの部分である。まして革マルは「拡大中執」の会議のために、ほとんど斗争にも参加していないのだ。

全共斗内部の不十分性をもはねのけた我々の斗いの前に、民青と有志連合は、寮食堂を放棄し出纈目な寮の屋上で大会をデッチ上げ彼らの意図した全学生の意志の見せかけは完全に粉砕された。

駒場と並行して本郷でも又、民青は、ゲバルトに守られ秘密のうちに次々と学生大会をデッチ上げ「封鎖 解除、スト中止、入試実数」の"全学の意志"の捏造に狂奔したのである。

更にマスコミは一勢に全共斗に対する最大級の憎悪を投げかけ、世論づくりを受け負ってゆく。

しかし、ニセモノはどこまでもニセモノでしかない。11日早朝、日大全共斗を中心とした百名の部隊が民青ピケを突破し安田講堂に入り東大全共斗百名と合流して安田講堂に民青は近よれなくなった。同夕方、全共斗を支持する三百名の隊列がどこからともなく登場し"民青帰れ！加藤殺せ！"のデモを行うや、民青の戒厳令は一挙に解除され、反帝学評を先頭に五百の部隊が駒場から本郷に移るや、民青は正門から安田講堂を完全に放棄したのである。民青による宗派利害の暴力的貫徹の薄汚れた策動は一挙に粉砕され、全共斗は法文一・二号館、工学部の一部を再度封鎖したのである。

こうして、全学集会↓各学部学生大会↓スト解除↓入試という策謀は完全に粉砕された。

そして、全共斗はこの東大斗争を全国学園の普遍的な課題として更に労働者階級の教育をめぐる斗いとの結合を目指して15日の「東大斗争勝利労働者・学生総決起集会」を提起した。

自民党文教委員会は、全共斗の一時的後退を観迎しながらも「十項目の確約」が妥協しすぎたとして、入試中止の恫喝をもって加藤代行により強硬な処置を迫ってゆく。

加藤体制は、15日に予想される暴力的対立という皮相な現象を口実に、学内の立入り禁止と、機動隊導入を宣言し、上智大に先例のある機動の常駐をほのめかし、民主的ポーズの背後に陰しもっていた暴力的本姿を、しかも飽く迄も人道の名の下に露わにし、15日に準備してゆく。

15日　民青・有志連合を紛砕し 労・学総決起集会をかちとる

十五日、全国から、十四日の連帯ストライキ（九大・文、駒沢大・文・法・短）学内集会を獲ち取った学友、さらに都内、関東の各地区反戦から青年労働者が結集し「東大斗争勝利、全国学園斗争勝利、労学総決起集会」が獲ち取られた。

我々は、12月16日「東大斗争勝利労学総決起集会」を提起し、労学の"反合" "反産協"の革命的連帯をもって、教育の帝国主義的改編に対決する斗いの方向性を明示し斗い抜いて来た。

十二月五日から開始された我が解放派の革マル派に対する「白色テロによる大衆組織の乗っ取り策動粉砕」の斗いは、同時に、東大闘争の自治会主義的個定化に実する闘いでもあった。

革マル派が東京反戦の闘う労働者の集会参加に実し、鉄パイプで襲いかかるという犯罪的行動に出たことは、東大闘争のプロレタリア的展開に実する反動的敵対として徹底的に弾劾されねばならない。

十五日、我々は、政府、当局の秩序回復＝反産協闘争の絞殺策動に対し、今日の社会の全秩序の帝国主義的改編に対し二重権力的団結をもって対決する闘いとして、労学の連帯を突き出し、ブルジョアジーの「入試」というブルジョア的「道義性」に対し、真の階級的道義性を、階級的連帯として登場させることをもって紛砕していく闘いの巨大な第一歩を獲得したのである。

反合、反産協の闘う労学の連帯をもって、東大闘争勝利、全国教育闘争勝利、さらに一〇年安保反戦、反合（反産協）の闘いを前進せしめ・よ

カンパ要請

全国各地で資本の攻撃をはねのけて闘いを進めている全ての労働者・学友諸君！

東大闘争は、一方における自民党文教委員会を中心とする資本の要請に忠実な右翼強硬派と、それに本質的歩調を合わせてゆく一月九日の二度に恒る機動隊の導入と秩父宮ラグビー場に於ける機動隊五千を背景にした全学集会の強行十五日の民青と全共闘の対立を口実にした機動隊による学園の占拠と常駐の意図という大学当局の弾圧、この加藤代行に迎合して登場した大量の秩序派、更には秩序とのユ着を深めつつ暴力的に宗派利害の貫徹を目論む日共＝民青・マスコミの憎悪と、全ゆる部分との激烈な闘いを続けている。

東大闘争の推進部隊であり全共闘の主流を担う我々は、十日の全学集会紛砕闘争において、百四十三名の大量検挙者と、負傷者を出した。連日の泊り込みの闘争に於いて今膨大な資金を必要としている。権力による東大闘争の圧殺を通じた全国教育闘争・反合 闘争の圧殺 を紛砕して 前進 するために、直ち にカンパ を要請する！

一月十三日
社青同労協解放派書記局